

『 身近な差別 』

菰野町立菰野中学校3年 山岸恵理子

私のクラスに車いすを利用し、両手が自由に動かない障害をもっている友達があります。彼とは家庭部でも2年間一緒に、彼のために色々お手伝いをしてきました。例えば、ビーズをひもに通したり、小さなビーズを一つずつビーズ入れから取ることや、また文字を書くときは紙をおさえたりするなど、私にとっては何気なくできることを、彼のためにお手伝いします。自分では当たり前に行える動作なので、どういう風にお手伝いしてもらったらうれしいのか、相手が作業しやすいのかが分からず試行錯誤しながらのお手伝いでした。でも、全てお手伝いできるわけではなく、彼はよく「できない」ことにイライラします。私が当たり前に行っている動作が自分一人だけできなかつたら、私も悔しくて悲しくてイライラしてしまうだろうなと思います。「気持ちは良くわかるよ。あきらめず頑張ろう。」と言いたいのですが、彼の気持ちを察すると、そういう声かけもためらわれ、私にはどうすることもできなくて歯がゆい気持ちになります。また一番難しいことは、どこまで手伝ったら良いかということです。2年間の中で、ここまではできるんだとか、これは少し工夫すればできるかもしれないなど、いろいろな発見がありました。だから最近では彼に、「できるということがあったら教えてね。」と言って、彼ができるチャンスを奪わないように気をつけています。

今年の5月にあった修学旅行でも、彼と同じ班になり、東京都内の班別行動をしました。その時も、車いすの人のバリアについて気づいたり考えたりすることがありました。最も考えさせられたことは、駅などの施設の不便さでした。エレベーターが離れたところにしかないのも、班の中で分かれて行動しなければならなかったのです。また、至るところに段差があることが車いすの彼には障がいとなり、段差でガタガタゆれることで酔いそうになると言っていました。さらに、電車に乗るときエレベーターが遠いことと、すごい人で混雑しているので班の仲間とうまく合流できなくて、予定の電車に乗り損ねてしまいました。混雑しているのは仕方がないことだけど、出勤するときにこうやってのりそこねて遅れてしまったらいけないので、きっと車いすの人は私たちが思っているよりずっと早く出勤するのかな、と思いました。こういうたくさん不便さを知り、健常者の私には普段気づかないころでも、車いすの人には大きな障がいなんだと改めて思いました。

一方、工夫されているなどと思う発見もありました。例えば、切符を買うとき販売機の位置が車いすの人の目線と同じくらいの高さで購入しやすくなっており、車いすの友達が普通にボタンを押して買っている様子を見て、誰もが使いやすいように考えられているなあと感心しました。もう一つすごいと思ったことは、電車に乗るときホームとの間にすき間があるので駅員さんがスロープをおいてくれることと、無線で降りる駅の駅員さんに連絡して連携をとってくれ、下車駅でスムーズに降りることができたことです。誰もが便利に過ごせるってとても難しいことだと思うけれど、一人ひとりがどうすれば障がいをもっている方も便利に過ごせるかをずっと考えて、具体的に改善し、誰もが住みやすい便利な社会にしていきたいです。

また、私がこれまで過ごしてきた中で耳にした、障がいをもつ人へのひどい言葉として「障がい者のくせに……」というのがあります。この言葉は障がいをもっている人に対して、大変失礼だと思います。きっと、そういうことを言う人たちの心の中には、障がいをもっているから自分たちより下だ、と見下している気持ちがあるから、そういう言葉が出てくるんだと思います。“障がいをもつ人たちにも平等に権利がある”という当たり前のことをもっと理解すべきだと思います。私は障がいをもっているその友達に、大切なことをたくさん教えてもらいました。例えばその子は、周りの人が少しでも体調が悪そうだと、自分がどんなに大変なときでも相手の心配をしてくれるのです。相手が誰であっても、その優しさはかわりません。自分が大変なときは、なかなか人を気遣うことができないものなのに、当たり前の人を気遣えるその友達を私は人として尊敬しています。きっとその子は人に優しくされているから、自分も人にやさしくできるんだろうな、と思います。私も困っている時に手をさしのべて快く手伝ったり、体調が悪いときには「大丈夫？」と、気遣ったり、何かできることはないか、もっとよく考えてみようと思います。

私は、これからも心のバリアフリーで障がいをもつ人に接していける人間になれるよう心がけていきたいです。